へに奉頼之旨再三及べり、其の上諸事御入魂に預り候はゞ、向後疎意を存まじき旨、牛王寶印之裏を飜し、上卷の起請文井人質を進上可申と、小早川吉川より申來りし也、

起請文種類

〔世事百談〕起請

さて起請文に一枚起請、二枚起請、また七枚起請、百枚起請などいふことあり、義經記に、土佐坊が七枚起請かけること見え、後のものながら室町殿日記、豐太閤朝鮮文書にも、七枚起請といふことと見えたり、七枚起請の文をば、かつて友人より得てもてり、文明年間のころ書きたるを寫しつたへたるなり、七枚各文章別なり、そは誓言いく通にもしるしたるものなり、おもふにそのかみは尋常のことは一枚にかき、その誓言の重かるは幾枚にも、かへす〳〵書けることゝ見えたり、源平盛衰記に、百枚の起請といふことあり、驢鞍橋に一枚起請、二枚起請、三枚起請といふことも見ゆ、これにて法然上人の一枚起請といふもこれにて明なり、起請といふ文字は、後漢書劉益子傳に、其餘不知書者起請之といふより出でたり、○下略

一枚起請

〔古今著聞集十二博奕〕花山院右のおとゞ○藤原兼雅のとき、侍共七半といふ事を好て、ありとしある物ども、夜る晝おびたゞしく打けり、おとゞ制し給へ共用ず、其中にいとまづしき格勤者一人有、もちたる物なければ、其人數にもれてうたざりけり、○中略さる程に、夜明にければ、おのれが一つ著たりける衣をぬぎて、人の錢五百文かりてけり、男のもとへもて來ていふ樣、人の十廿貫にてうたんも、又此少分の物にてうたんも、心をやる事はおなじ事也、我こゝろに、又おもしろし共思はぬ事なれば、あながちにおほくうち入てもせんなしといへば、男ありがたくうれしく覺て、其あした、やがて此錢ふところにひき入て、殿へ持て參ぬ、○中略此錢わづかに五百なれば、あまたゝびに出さんも見苦、たゞ一度にをし出して、打とられなばさてこそあらめと思て、よき程つゞきてまはる所に、おし出してかきたりければ、はやくかきおほせて、一貫に成ぬ、我もいまだ一度も去